

3 運転中止に拒否的である場合や、突然の運転中止によって、患者さんの意欲低下の恐れが強い場合は、まず、家族が同乗し、定期的に運転行動を観察するようにしましょう。また、安全に運転していると思われる場合にも、定期的な観察をして、チェックすることが大切です。

運転チェック

認知症が原因で、失敗することの多い運転行動について、観察しましょう。

以下の6項目について、特に注意して観察するようにしてください。そして、こうした運転がみられた日付をメモしておきましょう。その時の患者さんの様子などもメモしておくと、後で、主治医や警察署・免許センターに相談するときに役立ちます。

運転チェック	日付	日付	日付	気づいたこと
1. センターラインを越える				
2. 路側帯に乗り上げる				
3. 車庫入れ(指定枠内への駐車)に失敗する				
4. ふだん通らない道に出ると、急に迷ってしまう				
5. ふだん通らない道に出ると、パニック状態になる				
6. 車間距離が短くなる				

(熊本大学医学部 池田学教授 作成)

上の6項目の運転状況は、年をとっただけで増えてくる失敗というわけではなく、認知症という病気のためにさらに起こりやすくなる失敗です。1つでも繰り返して起こすようなときは、交通事故を起こす確率が高く、危険であることを示すサインです。患者さんも理解した上で運転を中止できるように、粘り強く説得しましょう。

4 相談窓口～運転中止がうまくいかないとき～

家族の話し合いでは解決できない問題があるとき、あるいは、どうしても患者さんが運転中止を拒否し、うまくいかない場合には、専門の機関に相談しましょう。事前に、電話などで担当者に事情を説明しておくことも有効です。

警察署、 免許センター

- 運転技能や運転免許についてなど、
運転にかかわる全般的なこと

運転適性相談窓口があります(認知症やその他の病気のために運転に不安がある場合などに、免許の更新について相談できます)。



病院、 診療所、 認知症疾患 医療センター

- 認知症のこと
 - 患者さんへの接し方
- 患者さんが運転しており、不安な場合には、主治医にも相談してみましょう。



市区町村の役場 高齢者福祉・ 介護関係の窓口

- 移動・外出支援サービスのこと
- 介護保険サービスのこと
- 高齢者福祉サービスのこと



その他、社会福祉協議会やシルバー人材センター、NPO法人(特定非営利活動法人)などで、移動・外出支援サービスを提供している場合もありますので、調べてみましょう。

■ 公共交通機関の乏しい地域にお住まいの場合

ご家族が同居している場合には、週末の買い物などに一緒に出かける工夫をしてください。高齢者の一人暮らしや高齢者のみの世帯では、地域の隣人や友人に、移動の援助を依頼しておくといでしょう。

あるいは、食材や生活用品の宅配サービスを実施している業者がありますので、利用を検討してみてもいかがでしょうか。また、お住まいの地域に、移動支援サービスや、買い物等の外出を支援するサービスがあるかもしれません。一度、市区町村の役場窓口にて調べてみてください。

■ 経済的な理由により運転中止が困難な場合

経済的な理由(たとえば、仕事を辞めることで収入が一切なくなる)により、どうしても運転を継続しなければならない場合には、できるだけ初期の段階で、患者さんが自動車を運転する必要のない生活に変えるなどの対応が必要です。そのためには、家族や知人などの周りの協力や支援が重要ですが、家族などの頼れる人がいない場合もあるかもしれません。おひとりだけで悩まず、お住まいの市区町村役場やお近くの地域包括支援センター、あるいは、地域の「認知症高齢者や家族を支える会」に相談するようにしてください。

■ 「鍵隠し」「車隠し」は最後の手段

運転を中止させるために、鍵や車を隠すことは、ご本人の興奮や被害妄想を悪化させ、**逆効果になる**ことがあります。認知症であっても、早期の段階で、ご本人と話し合い、きちんとした説明や納得を得られるような工夫が必要です。自動車の処分は、最後の手段と考えましょう。

■ 飲酒について

運転中止後に飲酒量が増えたり、過食行動や外出の欲求が増えたりする場合があります。その場合は、デイサービス・デイケアの利用やご家族がドライブに付き合う、趣味活動を取り入れるなどの行動に置き換えていく対応も効果的です。

■ (自動車の代わりとしての)「電動車いす」や「自転車」の利用について

電動車いすや自転車を、自動車の代わりとしてはどうか、とお考えになることもあるでしょう。しかし、認知症のように、認知機能が低下したり身体機能が低下したりする病気の場合、電動車いすや自転車の運転にも支障が生じるため、交通事故に遭う危険性が高くなり、お勧めできません。なるべく、公共交通機関や地域の移送サービス等、ご本人が運転操作をしない状況で、移動・外出を支援するようにしましょう。

運転中止に納得した患者さんが、忘れてしまうことを防ぐために

患者さんは、運転を中止したことを忘れてしまい、また運転しようとしてしまうかもしれません。そのようなときには、主治医に次のような文書を作成してもらうことも有効です。



〇〇〇〇さん

あなたは、もの忘れが始まっていて、安全に運転することが難しくなっています。このような場合、運転を続けることは危険であると、法律にも定められています。運転を中止するよう準備をしましょう。

〇△病院 医師 □□□□



ご自宅の目に付くところに貼って、患者さんが運転しようとしたら、こちらを見て頂き、「主治医の先生にこう言われて、運転を中止すると約束したでしょう。」と説明してください。

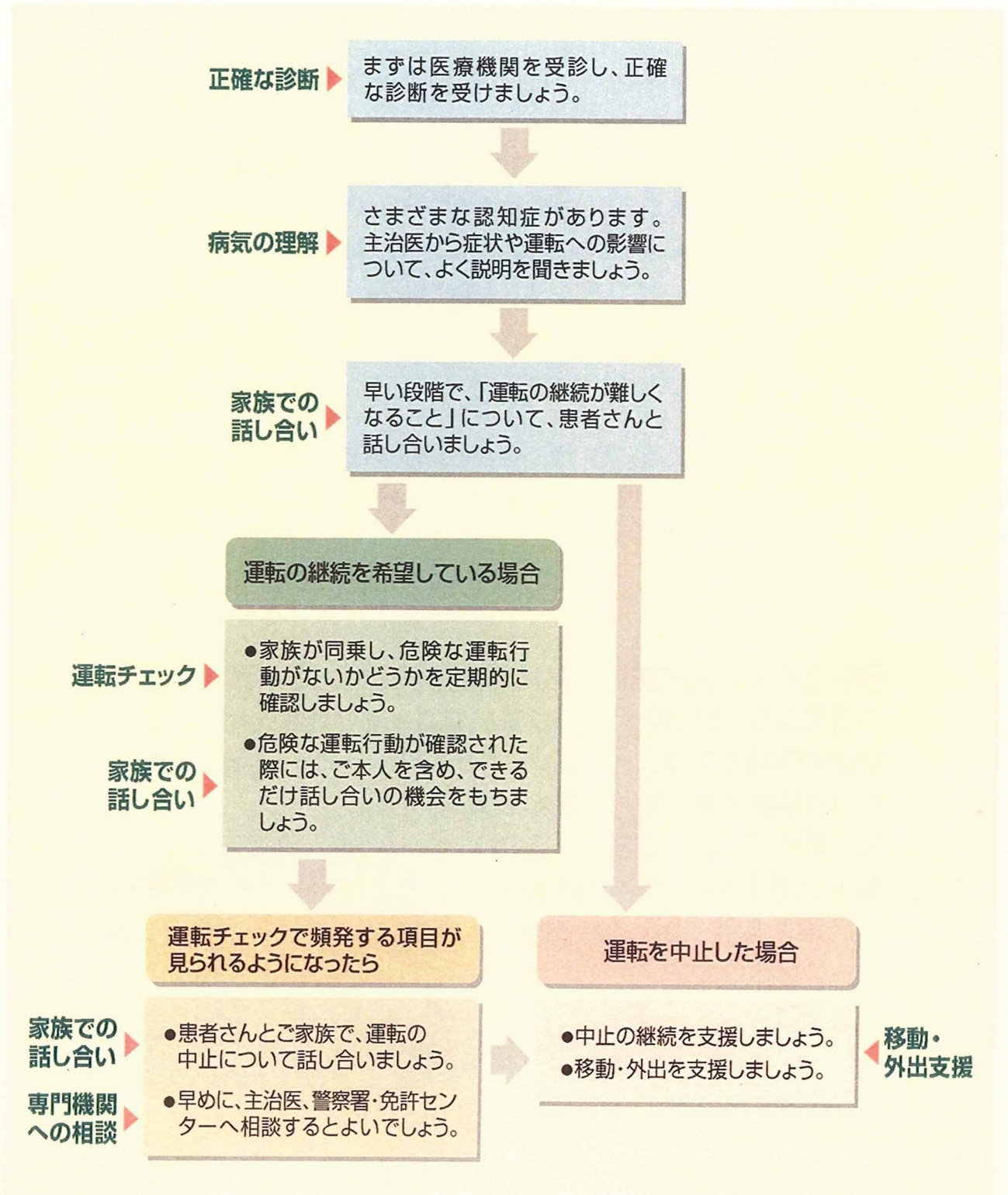
患者さんが、長年続けていた運転を中止したことは大きな決断であり、また中止を続けていることも、ご本人にとって我慢の連続であることでしょう。ご家族は、ぜひ、患者さんの努力と判断に対して、言葉をかけ^{ねぞら}労ってください。ご家族からの温かい言葉かけは、患者さんの気持ちを穏やかにし、自信にもつながります。



フローチャート

認知症高齢者の自動車運転への対応、考え方

● 自動車を運転している方が認知症かもしれない、という心配が出てきたときに、参照してください。



memo

A large rectangular area with horizontal lines, intended for writing a memo.



認知症高齢者の
自動車運転を考える

家族介護者のための
支援マニュアル®

認知症高齢者の安全と安心のために

認知症 ドライバー

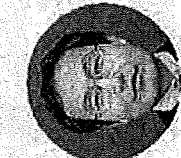
判断力や行動手エツクを

中央線を越えても自覚がない。事故を起こしたことを忘れていた。認知症ドライバーの特徴だ。記憶力や判断力が低下し、思わぬ事故につながらず、運転をやめたいと願う家族は多い。本人とどう向き合えば良いのだろうか。

認知症ドライバーは 多くみられる特徴

- どこへ行くつもりか分からない
- 事故を起こしたことを忘れる
- センターラインを越えて蛇行運転する
- 交通標識や信号などの交通規則を守る気がなくなる
- 一定の車間距離をとる気にならない
- 車庫入れができない
- 逆走する

(出典：国土領大の所 正文教授
「高齢ドライバー」 滋野博代氏など)

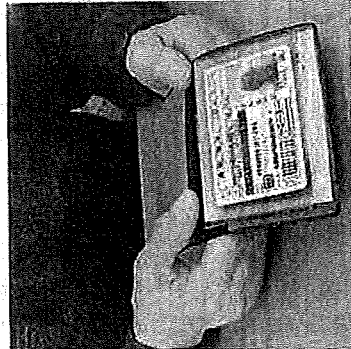


警察庁は2005年時点で、運転免許を持っている認知症の高齢者を30万人と推定した。国土領大の所 正文教授(交通心理学)は写真1は、免許保有率の高い団塊世代が高齢になり、さらに増えている可能性がある」と指摘。研究の蓄積も

「どうい
う症状が
運転行動
にどう結
びつくの

「認知症の人と家族の会」神奈川県支部は昨年9月、会員を対象にアンケートを実施した。世話人田村架代子さんは「何十年も無事故で運転に自信を持っている人が多く、免許の返納には抵抗があるようだ」と分析。「高齢者にとって運転することは自立の象徴。簡単に返納させるのではなく、精神的フォローや代替手段が必要だ」と話す。

坂本二美さん(74)は、夫(75)の退職後に移り住んだ山梨県から神奈川県に引っ越してきた。車好きの夫がアルツハイ



「夫は認知症なのに...」。坂本二美さん(仮名)が手にするのは、更新された夫の運転免許証

か、そのためどう
いう検査を開発すべ
きか、まだわからな
いことは多い」と話
す。
昨年6月から運転
免許を更新する際、
75歳以上の高齢ドラ
イバーに認知機能検
査が義務付けられた
が、正確な判断は難
しいといわれる。日
本交通心理学会の運

高齢者は免許返納に抵抗感 運転の意味 家族で考えて

イマー型認知症と診断され
たからだ。山小屋暮らしに
必要だった車は、本人の知
らない間に売却。しかし夫
は昨年5月、免許を更新す
る際に70歳以上の人に求め
られる高齢者講習をクリア
してしまっただけで、「妻さん
は『教習所に『不合格』と言
ってもらいたかった』と後
悔する。

岩手県の佐藤隆さん(54)は、脳血管性認知症
になった父(88)を
免許の更新を見送る
よう説得した。父は
坂道でサイドブレー
キをかけずに駐車し
自分の車にひかれる
などの事故を起こすように
なっていて「他人を巻き込
まない方がいい」との家族
の忠告を渋々受け入れた。
隆さんは「身近な家族の話
は聞かないことが多い。第
三者に言われた方が効果か
もあるかも」と話す。

国立長寿医療センター長
寿政策・在宅医療研究部の
荒井由美子部長らの厚生労
働科学研究班は、認知症の
基礎知識や事例に基づいた
対処法、運転行動のチェッ
ク項目などをまとめた家
族のための支援マニュアル
を同部のホームページ上で
公開、全国の自治体にも配
布する。

荒井部長は「運転する意
味や目的を考え、運転以外
の生きがいや移動の手段を
見つけることが大切だ」と
話している。

「認知症高齢運転者」の 介護者支援マニュアル

国立長寿医療センター

国立長寿医療センター
は、「認知症高齢者の自

動車運転を考える家族介
護者のための支援マニユ
アル」を、8日からイン
ターネットで無料ダウン
ロード配布する。高齢運
転者が認知症になった場
合、どこに相談したら
いいかわからないと悩む家
族介護者も多いのが現
状。同マニュアルでは、
認知症に起因する運転時
のリスクや運転継続が望

ましくなくなった場合の
対応など、これまでの研
究で得た成果を具体例を
交えて紹介している。
支援マニュアルは、同
センター長寿政策・在宅
医療研究部ホームページ
(<http://www.nils.go.jp/department/dsp/index-dsp-j.htm>)でダウンロード
できる。

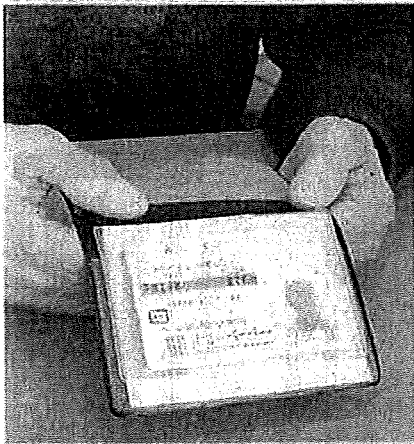
中央線を越えても自覚がない。事故を起こしたことを忘れていた。認知症ドライバーの特徴だ。記憶力や判断力が低下し、思わぬ事故につながりかねず、運転をやめてほしいと願う家族が多い。本人とどう向き合えば良いのだろうか。

認知症ドライバー

警察庁は2005年時点で、運転免許を持つている認知症の高齢者を30万人と推定した。国土館大の所正文教授（交通心理学）は、免許保有率の高い団塊世代が高齢になり、さらに増えている可能性がある」と指摘。研究の蓄積も乏しく、「どういった症状が運転行動にどう結びつくのか、そのためにどういった検査を開発すべきか、また分からないことは多い」と話す。

昨年6月から運転免許を更新する際、75歳以上の高齢ドライバーに認知機能検査が義務付けられたが、正確な判断は難しいといわれる。日本交通心理学会の運営委員を務める石川淳也・中央自動

免許返納に抵抗感



「夫は認知症なのに…」坂本一美さん（仮名）が手にするのは、更新された夫の運転免許証

精神的フォロワーが必要

夫がアルツハイマー型認知症と診断されたから、山小屋暮らしに必要だった車は、本人の知らない間に売却。しかし夫は昨年5月、免許を更新する際に70歳以上の人に求められる高齢者講習をクリアしてしまった。岩手県の佐藤隆さん（54）は、脳血管切だ」と話している。

夫がアルツハイマー型認知症と診断されたから、山小屋暮らしに必要だった車は、本人の知らない間に売却。しかし夫は昨年5月、免許を更新する際に70歳以上の人に求められる高齢者講習をクリアしてしまった。岩手県の佐藤隆さん（54）は、脳血管切だ」と話している。

車学校（盛岡市）社長は「疑わしい場合は、年齢に関係なく検査を受けさせるべきだ」と語る。信を持つている人が多いため、精神的フォロワーや代替手段が必要だ」と話す。

「認知症の人と家族の会」神奈川支部は昨年9月、会員を対象にアンケートを実施した。世話ることは自立の象徴。簡単に返納させるのではなく、精神的フォロワーや代替手段が必要だ」と話す。

「認知症の人と家族の会」神奈川支部は昨年9月、会員を対象にアンケートを実施した。世話ることは自立の象徴。簡単に返納させるのではなく、精神的フォロワーや代替手段が必要だ」と話す。

認知症ドライバーに多くみられる特徴

- どこへ行くつもりか分からない
 - 事故を起こしたことを忘れる
 - センターラインを越えて蛇行運転する
 - 交通標識や信号などの交通規則を守る気がなくなる
 - 一定の車間距離をとる気なくなる
 - 車庫入れができない
 - 逆走する
- （出典：国土館大の所正文教授）
「高齢ドライバー 激増時代」など

性認知症になった父（88）を、免許の更新を見送るよう説得した。父は坂道でサイドブレーキをかけたまま駐車し、自分の車にひかれるなどの事故を起こすようになった。一他人を巻き込まない方がいい」との家族の忠告を渋々受け入れた。隆さんは「身近な家族の話は聞かないことが多い。第三者に言われた方が効果があるかも」と話す。

国立長寿医療センター長寿政策・在宅医療研究部の荒井由美子部長らの厚生労働科学研究班は、認知症の基礎知識や事例に基づいた対処法、運転行動のチェック項目などをまとめた、家族のための支援マニュアルを同部のホームページ上で公開、全国の自治体にも配布する。

荒井部長は「運転する意味や目的を考え、運転以外の生きがいや移動の手段を見つけていることが大切だ」と話している。

運転する意味や目的を考えて

中央線を越えても自覚がない。事故を起こしたことを忘れていた。認知症ドライバーの特徴だ。記憶力や判断力が低下し、思わぬ事故につながりかねず、運転をやめてほしいと願う家族は多い。本人どう向き合えば良いのだろうか。

認知症ドライバー

警察庁は2005年時点で、運転免許を持っていて認知症の高齢者数を30万人と推定した。国土筆大の所正文教授(交通心理学)は、免許保有率の高い団塊世代が高齢になり、さらに増えている可能性があると指摘。研究の蓄積も乏しく「どういった症状が運転行動につながるのか、そのためにもどういった検査を開発すべきか、まだ分からないことは多い」と話す。

専学校(盛岡市)社長は「疑わしい場合は、年齢に関係なく認知機能検査を受けさせるべきだ」と語る。

「認知症の人と家族の会」神奈川県支部は昨年9月、会員を対象にアンケートを実施した。世話人田村加代子さんは「何十年も無事故で運転に自信を持っている人が多く、免許の返納には抵抗があるようだ」と分析。「高齢者にとって運転することは自立の象徴。簡

単に返納させるのではなく、精神的サポートや代替手段が必要だ」と話す。岩手県の佐藤隆さん(54)は、脳血管性認知症になった父(88)を、免許の更新を促さるよう説得した。父は坂道でサイドブレーキをかけずに駐車し自分の車にひかれるなどの事故を起こすようになっていて「他人を巻き込まない方がいい」との家族の忠告を度々受け入れた。隆さんは「身近な家族の話は聞かないことが多い。第三者に言われた方が効果があるかも」と語る。

第三者の忠告が効果的

昨年6月から運転免許を更新する際、75歳以上の高齢ドライバーに認知機能検査が義務付けられたが、正確な判断は難しいといわれる。日本交通心理学会の運営委員を務める石川淳也・中央自動車

単に返納させるのではなく、精神的サポートや代替手段が必要だ」と話す。坂本一美さん(74)は「父(71)は1年半前、夫(75)の退職後に移り住んだ山梨県から神奈川県に戻ってきた。車好きの夫がア

国立長寿医療センター長寿政策・在宅医療研究部の荒井由美子部長らの厚生労働科学研究班は、認知症の基礎知識や事例に基づいた対処法、運転行動のチェック項目などをまとめた、家族のための支援マニュアルを同部のホームページ上で公開、全国の自治体にも配布する。

荒井部長は「運転する意味や目的を考え、運転以外の生きがいや移動の手段を見つけることが大切だ」と話している。



- 認知症ドライバーは多くみられる特徴
- どこへ行くつもりか分からない
 - 事故を起こしたことを忘れる
 - セリフやサインを覚えて走行し続ける
 - 交通標識や信号などの交通規則を守ることがなくなる
 - 一定の車間距離をとる気にならなくなる
 - 車庫入れができない
 - 逆走する

ルツハイム1型認知症と診断されたからだ。山小豊から「必要だった車は、本人の知らない間に売

区内に抵抗感 家族の支援大切

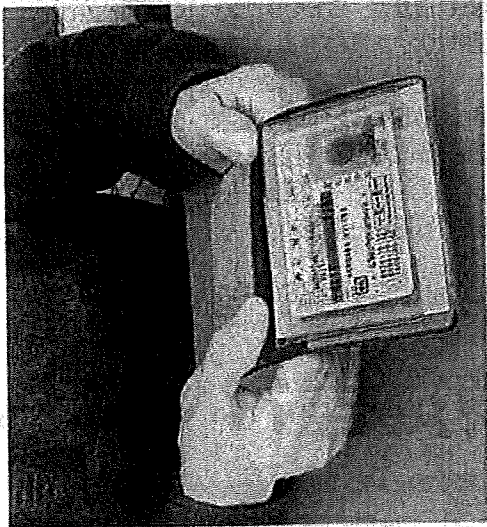
認知症と運転免許

中意識を奪われても自覚がない。事故を起こしたことを忘れていた。認知症ドライバーの特徴。記憶力や判断力が低下し、思わぬ事故につながりかねず、運転を止めほしいと願う家族は多い。本人どうに向き合えば良いのだろうか。

警察庁は2005年時
点、運転免許を持って
いる認知症の高齢者数を
30万人と推定した。国土
領土の所正文教授（交通
心理学）は、免許保有率
の高い団塊世代が高齢に
なり、さらに増えている

可能性があると指摘。研
究の蓄積も乏しく「どう
いう症状が運転行動にど
う結びつくのか、そのた
めにどういった検査を開発
すべきか、まだ分からな
いことは多い」と話す。

昨年6月から運転免許
を更新する
際、75歳以上
の高齢ドライ
バーに認知機
能検査が義務
付けられた



「夫は認知症なのに」。坂本一美さん（仮名）
が手にするのは、更新された夫の運転免許証

代替手段見つけて

が、正確な判断は難しい
とされる。日本交通心
理学会の運営委員を務め
る石川淳也・中央自動車
学校（静岡市）社長は「疑
わしい場合は、年齢に関
係なく認知機能検査を受
けさせるべきだ」と語る。

「認知症の人と家族の
会」神奈川県支部は昨年
9月、倉倉を対象にメン
ケイトを実施した。世話
人田村加代子さんは「何
十年も無事故で運転に自
信を持っている人が多
く、免許の返納には抵抗
があるようだ」と分析。
「高齢者にとって運転す
ることは自立の象徴。簡
単に返納させるのではな
く、精神的フォローや代
替手段が必須だ」と語る。

坂本一美さん（仮名）は
1年半前、夫（75）
の退職後に移り住んだ山
梨県から神奈川県に長く
てきた。車好きの夫がア
ルツハイマー型認知症と
診断されたからだ。山小
屋暮らしに必要だった車

は、本人の知らない間に
売却。しかし夫は昨年8
月、免許を更新する際に
70歳以上の人に求められ
る高齢者講習をクリアし
てしまった。「一美さんは
「講習所に『不合格』と
言ってもらいたかった」
と後悔する。

岩手県の佐藤隆さん
（64）も同じく、脳血管
認知症になった父（88）
を、免許の更新を見送る
よう説得した。父は遠通
りドライブし井ぞから
ずに駐車し自分の車にひ
かれるなどの事故を起し
すまぬことについて「他
人を巻き込まない方がい
い」との家族の忠告を悉
く受け入れた。隆さんは
「身近な家族の話は聞か
ないことが多い。第三者
に言われた方が効果があ
るかも」と語る。

国立長寿医療センター
長寿政策・在宅医療研究
部の荒井由美子部長らの
厚生労働科学研究班は、
認知症の基礎知識や事例
に基づいた対処法、運転
行動のチェック項目など
をまとめた「家族のため
の支援マニュアル」を同部
のホームページ上で公
開。全国の自治体にも配
布する。荒井部長は「運
転する意味や目的を考へ、
運転以外の生きがいや移
動の手段を見つめること
が大切だ」と話している。

認知症ドライバーに 多くみられる特徴

- どこへ行くつもりか
が分からない
- 事故を起こしたことを忘れる
- センターラインを越えて蛇行
運転する
- 交通標識や信号などの交通規
則を守る気がなくなる
- 一定の車間距離をとる気がな
くなる
- 車庫入れができにくい
- 逆走する
（出典：国土領土の所正文教授
「高齢ドライバー、激増時代など」）

運転以外の生きがいを

認知症ドライバー どう対処？

中央線を越えても自覚がない。事故を起こしたことを忘れていた。認知症ドライバーの特徴だ。記憶力や判断力が低下し、思わぬ事故につながりかねず、運転をやめてほしいと願う家族も多い。本人どう向き合えば良いのだろう。

警察庁は2005年時点で、運転免許を持っている認知症の高齢者を30万人と推定した。国土領大の所正文教授(交通心理学)は、免許保有率の高い団塊世代が高齢になり、さらに増えている可能性がある」と指摘。研究の蓄積も乏しく「どういった症状が運転行動にどう結びつくのか、そのためにどういった検査を關

夫がアルツハイマー型認知症と診断されたからだ。小幡君らしに必要だった車は、本人の知らない間に売却。しかし夫は昨年5月、免許を更新する際に70歳以上の人に求められる高齢者講習をクリアしてしまった。「一美さんは「教習所に『不合格』と言ったこともいらなかった」と後悔する。

忠告を涼々受け入れ

岩手県の佐藤隆さん(54)は、脳血管性認知症になった父(88)を、免許の更新を見送るよう説得した。父は坂道でサイドブレーキをかけるに駐車し自分の車にひかれるなどの事故を起こすようになっていて「他人を巻き込まな

精神的フォローも必要

察すべきか、また分からないことは多い」と話す。

正確な判断難しく

昨年6月から運転免許を更新する際、75歳以上の高齢ドライバーに認知機能検査が義務付けられたが、正確な判断

世話人田村加代子さんは「何十年も無事故で運転に自信を持っている人が多く、免許の返納には抵抗があるようだ」と分析。「高齢者にとって運転することは自立の象徴。簡単に返納させるのではなく、精神的フォローや代替手段が必要だ」と話す。

い方がいどの家族の忠告を

隆さんは身近な家族の話は聞かないことが多い。第三者に言われた方が効果があるかも」と話す。

国立長寿医療センター長寿政策、在宅医療研究部の荒井由美子部長らの厚生労働科学研究班は、認知症の基礎知識や事例に基づいた対処法、運転行動のチェック項目などをまとめた、家族のための支援マニュアルを同部のホームページ上で公開、全国の自治体にも配布する。

荒井部長は「運転する意味や目的を考えた、運転以外の生きがいや移動の手段を見つめることが大切だ」と話している。

坂本一美さん(54)「仮名」は、1年半前、夫(75)の退職後に移り住んだ山梨県から神奈川県に戻ってきた。車好きの



所正文 国土領大教授

認知症ドライバーは 多岐にわたる特徴

- どこへ行くとうとうといていながら分からない
 - 事故を起こしたことを忘れる
 - センターラインを越えて蛇行運転する
 - 交通標識や信号などの交通規則を守る気がなくなる
 - 一定の車間距離をとる気になくなる
 - 車庫入れができなくなる
 - 逆走する
- (出典：国土領大の所正文教授「高齢ドライバー」増殖時代など)

認知症と運転免許

返納に抵抗も 家族が支援を

中線を越えとも自覚がない。事故を起こしたことを忘れていた。認知症ドライバーの特徴だ。記憶力や判断力が低下し、思わぬ事故に巻き込まれ、運転を止めほしいと願う家族は多い。本人どう向き合えば良いのだろうか。

75歳以上に検査義務

▶▶▶ 正確な判断は困難

警察は2005年時点で、運転免許を保持している認知症の高齢者数を30万人と推定した。国土第大の所正文教授(交通心理学)は、免許保有率の高い団塊世代が高齢になり、さらに増えている可能性があるという。研究の蓄積も乏しく、どういった状況が運転行動にどう結びつくのか、そのためにどういった検査を開発すべきか、まだ分からないことが多いと話す。

昨年6月から運転免許を更新する際、75歳以上の高齢ドライバーに認知機能検査が義務付けられたが、正確な判断は難しいといわれる。

「認知症の人と家族の会」神奈川支部は昨年9月、会員を対象にアンケートを実施した。世話人田村加代さんは「何

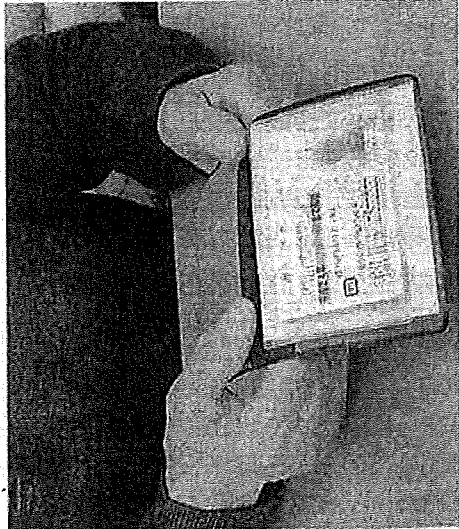
十年も無事故で運転に自信を持っている人が多く、免許の返納には抵抗があるようだ」と分析。「高齢者にとって運転することは自立の象徴。簡単に返納させるのではなく、精神的フォローや代替手段が必要だ」と話す。

坂本一美さん(仮名)は「返納は1年半前(75)の退職後に移り住んだ山梨県から神奈川県に戻ってきた。車好きの夫がアルツハイマー型認知症と診断されたからだ。山小屋暮らしに必要だった車は、本人の知らない間に売却。かしは昨年5月免許を更新する際に70歳以上の人に求められる高齢者講習をクリアしてしまった。一美さんは講習所に不合格」と言ってもらった。かたは後悔する。

岩手県の佐藤隆さん

(54)と同じは、脳血管性認知症になった父(88)を、免許の更新を見送るよう説得した。父は坂道でサイドブレーキを引かず、勝手に自分の車にのしかかるといって、「他人を巻き込まない方がいい」との家族の屋敷を幾度受け入れた。隆さんは「身近な家族の話は聞かないことが多い。第三者に言われた方が効果があるかも」と話す。

国立長寿医療センター長寿政策在宅医療研究部 荒井由美子部長の厚生労働科学研究班は、認知症の基礎知識や事例に基づいた認知症運転行動のチェック項目などをまとめた、家族のための支援マニュアルを同部のホームページ上で公開。全国



「夫は認知症なのに...」。坂本一美さん(仮名)が手にするのは更新された夫の運転免許証

認知症ドライバーは「信」多々みられる特徴

- どこへ行くつもりか
 - 自分が分からなかったことを忘れて
 - 事故を起こしたことを忘れて
 - センタラインを越えて
 - 運転する
 - 交通標識や信号などの交通規則を守る気がなくなる
 - 一定の車間距離をとる気がなくなる
 - 車庫入れができない
 - 逆走する
- (出典：国土第大の所正文教授(高齡ドライバー一激増時代など))

中央を越えても自覚がない。事故を起こしたことを恐れていた。認知症ドライバーの特徴。記憶力や判断力が低下し、思わぬ事故につながりかねず、運転を止めほしいと願う家族も多い。本人どう向き合えばいいのだろう。

認知症ドライバー どう“引退”させる？

◆推定30万人

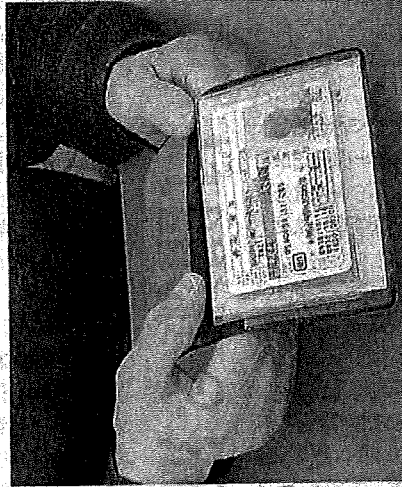
警察庁は2009年時点で、運転免許を持っている認知症の高齢者数を30万人と推定した。国土交通省の所長 正文教授（交通心理学）は、免許保有率の高い団塊世代が高齢になり、さらに増えている可能性があると指摘。研究の進展も乏しく、「このままでは、運転行動はいつか終わるのか、そのためにどういった対策を講ずべきか、まだ分からないことが多い」と語る。

昨年10月、運転免許を更新する際、75歳以上の高齢ドライバーに認知機能検査が義務付けられたが、正確な判断は難しいといわれる。日本交通心理学会の運営委員を務める石川浩二氏は「認知機能検査は、年齢に関係なく認知機能検査を受けざるべきだ」と語る。

「認知症の人と家族の会」神奈川県支部は昨年9月、会員を対象にアンケート

第三者が忠告／運転以外に生きがい

抵抗感なくすフオローを



「夫は認知症なのに…」。坂本一美さん（仮名）が手にするのは、更新された夫の運転免許証

を実施した。世話人、田村加代子さんは「何十年も無事故で運転に自信を持っている人が多く、免許の返納には抵抗があるものだ」と分析。「高齢者にとって運転することは自立の象徴。簡単に返納させるのではなく、精神的フオローや代替手段が必要だ」と語る。

◆家族よりも

坂本一美さん（仮名）は1年半前、夫の退職後に移り住んだ山梨県の

から神奈川県に戻ってきた。車好きの夫はクルマが大好きで、認知症と診断されたら、山梨暮らしは必要だった。本人の知らない間に売却。しかし夫は昨年10月、免許を更新する際に75歳以上の人に求められる高齢者講習をクリアしてしまった。一美さんは「教習所に不信感」と言いつつ、

「若手車の修繕さん（仮名）」は、脳血管性認知症

になつた父(88)を、免許の更新を見送るよう説得した。父は経済をサボってしまえば、クルマは自分の車にひかれるなどの事故を恐るまじく、どうして「他人を巻き込まない方がいい」との家族の意見を断り続けた。隣さんは「身近な家族の話は聞かないことが多い。第三者に言われた方が効果があるかも」と語る。

◆マニュアル

国立長寿医療センター長 藤政策、在宅医療推進部の 荒井孝子部長らの厚生労働省 認知症対策推進部は、認知症の対応法、運転行動のチェック項目などをまとめた「家族のための支援マニュアル」を同部のホームページ上で公開、全国の自治体にも配布する。

荒井部長は「運転する意味や目的を考え、運転以外の生きがいや移動の手続きを見つめることが大切だ」と話している。

認知症ドライバーに多くみられる特徴

- どこへ行くかわからない
 - 事故を起こしたことを忘れる
 - センターラインを越えて蛇行運転する
 - 交通標識や信号など交通規則を守ることがなくなる
 - 一定の車間距離をとる気にならなくなる
 - 車庫入れができない
 - 逆走する
- （国土交通省の所長 正文教授より）
（高知ドライバー一歩隊時代など）

中央線を越えても自覚がない。事故を起こしたことを忘れていた。認知症ドライバーの特徵だ。記憶力や判断力が低下し、思わぬ事故にやむを得ず、運転をやめたいと願う家族は多い。本人とどう向き合えば良いのだろうか。

認知症ドライバーは？ 多くある特徴

- どこへ行くつもりか分からない
 - 事故を起こしたことを忘れて運転する
 - センサーラインを越えて走行
 - 交通標識や信号などの交通規則を覚えている気がなくなる
 - 一定の車間距離をとる気がなくなる
 - 車庫入れができなくなる
 - 逆走する
- (出典：国土領大の所正文教院「高齢ドライバー一歩時代はど」)

意味や目的を考えて

警察は2005年時点で、運転免許を持っている認知症の高齢者を30万人と推定した。国土領大の所正文教院(交通心理学)は、免許保有率の高い団塊世代が高齢になり、さらに増えている可能性があると指摘。研究の進展を促すべく「どういった状況で運転行動にどう関わっていくか、そのためにどういった検査を随時すべきか、まだ分からないことは多い」と話す。

昨年9月から運転免許を返納する際、75歳以上の高齢ドライバーに認知

認知症と運転免許



機能検査が義務付けられ、だが、正確な判断は難しくいといわれる。日本交通心理学会の運営委員を務める石川澤也・中央直動専門学校(愛媛県)校長は「疑わしい場合は、年齢に関係なく認知機能検査を受けさせるべき」と語る。

「認知症の人と家族の会」神奈川県支部は昨年9月、会費を支払ってアンケートを実施した。世話

人白河加代さんは「何十年も無事故で運転に自信を持っていた人が多く、免許の返納には抵抗があるようだ」と話す。

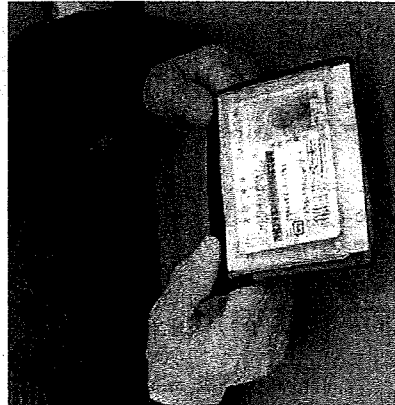
「高齢者にとって運転するのは自立の象徴。簡単に返納させるのではなく、精神的フォローや代管手配が必要だ」と話す。

坂本一美さん(仮)は「仮名」は5年半前、夫(仮)の退職後に残り生活した山梨県から神奈川県に戻ってきた。車好きの夫がアルツハイマー病と診断されたから

求められる高齢者講習をクリアしてしまっただけ。一美さんは講習中に「不慮の急ブレーキ」を踏まされた。岩手県の佐藤隆さん(仮)も「同じく、脳血管性認知症になった父の急死を知った。父は坂道を下りながら車を走らせて、勝手に自分の車にひかれるなどの事故を起こすなど、どうして他人を巻き込まない方がいい」との家族の忠告を幾度か聞いた。一美さんは「認知症の疑は聞かないことが多い。第三者に言われた方が効果があるのだ」と話す。

国土領大所正文教院の教授である佐藤隆さんは「認知症の疑は聞かないことが多い。第三者に言われた方が効果があるのだ」と話す。

国土領大所正文教院の教授である佐藤隆さんは「認知症の疑は聞かないことが多い。第三者に言われた方が効果があるのだ」と話す。



「夫は認知症なのに…」坂本一美さん(仮名)が手にとるのは、更新された夫の運転免許証

運転の意味、目的を考え

中央線を越えても自覚がない。事故を起こしたことを忘れていた。認知症ドライバーの特徴だ。記憶力や判断力が低下し、思わぬ事故につながるが、運転をやめたいと願う家族は多い。本人どう向き合えば良いのだろうか。

警察庁は2005年時点で、運転免許を持っている認知症の高齢者を30万人と推定した。国士館大の所正文教授(交通心理学)は、免許保有率の高い団塊世代が高齢になり、さらに増えている可能性があるという指摘。研究の蓄積も乏しく、この症状が運転行動にどう結びつくのか、そのためどういった検査を開発すべきか、まだ分からないことが多い」と話す。

昨年6月から運転免許を更新する際、75歳以上の高齢ドライバーに認知機能検査が義務付けられたが、正

認知症ドライバーと向き合う

確な判断は難しいといわれる。日本交通心理学会の運営委員を務める石川淳也(盛岡市)は「疑わしい場合は、車好きの夫がアルツハイマー年齢に関係なく認知機能検査を受けさせるべきだ」と語る。

「認知症の人と家族の会」神奈川支部は昨年9月、会員を対象にアンケートを実施した。世話人田村加代子さんは「何十年も無事故で運転に自信を持っている人が多く、免許の返納には抵抗があるようだ」と分析。「高齢者にとって運転することは自立の象徴。簡単に返納させるのではなく、精神的フォローや代替手段が必要だ」と話す。

坂本二美さん(74)は「坂名は1年半前、夫(76)の退職後に移り住んだ山梨県から神奈川に戻ってきた。車好きの夫がアルツハイマー型認知症と診断されたが、山小屋暮らしに必要なものは、本人の知らない間に売却。しかし夫は昨年5月、免許を更新する際に75歳以上の人に求められる高齢者講習をクリアできなかった。二美さんは教習所に「不合格」と言ってもらいたかったと後悔する。岩手県の佐藤隆さん(54)も同じ。脳血管性認知症になった父(88)を、免許の更新を見送るよう納得した。父は坂道でサイドブレーキをかけずに駐車し自分の車にひかれるなどの事故



を起すようになった。「他人を巻き込まない方がいい」との家族の忠告を徐々に受け入れた。隆さんは身近な家族の話は聞かないことが多い。第三者に言われた方が効果があるかも」と話す。

国立長寿医療センター長寿政策・在宅医療研究部の荒井由美子部長らの厚生労働科学研究班は、認知症の基礎知識や事例に基づいた対処法、運転行動のチェック項目などをまとめた、家族のための支援マニュアルを同部のホームページ上で公開、全国の自治体にも配布する。

荒井部長は「運転する意味や目的を考え、運転以外の生きがいや移動の手段を見つけることが大切だ」と話している。



「夫は認知症なのに……」。坂本二美さん(坂名)が手にするのは、更新された夫の運転免許証

認知症ドライバーは「信多」くみられる特徴

- どこへ行くつもりとしていない
- 事故を起こしたことを忘れる
- センターラインを越えて蛇行運転する
- 交通標識や信号などの交通規則を守ることがなくなる
- 一定の車間距離をとる気にならなくなる
- 車庫入れができにくい
- 逆走する

(出典：国士館大の所正文教授「高齢ドライバー―激増時代など」)

● ニュース情報 ●

国立長寿医療センター（愛知県大府市）長寿政策・在宅医療研究部は、車の運転を続けてきた高齢者が認知症になった場合の対処法を家族にアドバイスするマニュアルを作成した。無料でダウンロード配布している。

同センターが3年にわたって認知症の人が運転するリスクや社会支援の在り方などについて研究してきた成果を生かした。認知症の

* 認知症ドライバーへの対処法

原因別の運転の特徴や、運転をスムーズにやめてもらうためのノウハウ、運転をやめた後の接し方などのアドバイスをイラスト付きで分かりやすく解説、事例紹介もある。

入手は同センターのホームページから。アドレスは<http://nils.go.jp/department/dgp/index-dgp-j.htm>